

北設楽の花祭

——その祭儀空間の構造について——

春日井 真英

地固^{ぢがた}めの踊りはねくる此庭に
悪魔⁽¹⁾を除けて神ぞ入り来る

これは「花祭」で唱われる歌ぐらの一つである。祭の冒頭、神事の一部として舞われる撓、笛の舞といわれる楽の舞などに続くこの地固めの舞は歌詞からも判るように、ここに新しい大地を踏み固め、その新しい大地に神々を招請し、その神々の加護と予祝を願う世界の再生の物語を説く序といふことができよう。この物語は延々と翌日の夕刻近くまで続く祭の中で展開されてくるのである。地区によって異なるが「湯立て⁽²⁾」の後でこの舞いが行なわれるのを見るとその象徴性が一層強く感じられる。このように新生、もしくは再生した大地と象徴される花祭の舞庭に招請される神々はどこから顕現^{みま}れしてくるのであるうか。

土公荒神はこのさんじん^参のうちの

戌亥のすみのにしきのまき柱に

しっか⁽³⁾とたちたまへ

わが庵は戌亥の隅に神ぞすむ

高天原と人はいふらん⁽⁴⁾

これら『大土公宝祭文』や歌ぐら、また中在家の『さんごばやし』⁽⁵⁾、小林の『しきさんぐう』⁽⁶⁾などからは「戌亥」という方位が神々と密接な関係にあることを理解することができる。他の諸々の祭文等にも方位は出現するが、それは東西南北中央の五方位として用いられており、この「戌亥」のように単独で用いられてはいない。

「戌亥」とは北西の方角を意味するのであるがこの「戌亥」隅に住む神には福德をさづける力があつたことは注意すべきであろう。三谷栄一はこの戌亥隅に降臨する神とその対称に位置する辰巳隅の神は同一概念から導き出された神と考えている。⁽⁷⁾このことは「辰巳」の家と称し、東南の方向から家に続く道を有する家屋を尊重する山内の場合にも該当するといえよう。これを花祭の場合に当てはめて検討してみると次のような考えが導き出される。つまり、辰巳隅の神と戌亥隅の神が三谷の理解するように同じ概念に基づいているとしてもこの二神の違いは、花祭でみると戌亥隅の神に定着神的性格が考えられるのに対し、辰巳の隅の神には来訪神的性格を見ることができるとは北設楽地方の家屋構造を合せて考えれば理解できる。山内に限らずこの地方の古い民家は外に連る道を辰巳の方向に求め、辰巳からの来訪者を迎えるという象徴的構造を示すと同時に、各戸の神棚・仏壇（神・仏の住み分けは行なわれていない）は戌亥の方に当る奥デェで祀られていることがコスモスとしての家に定着神としての機能を見ることができるところが、この来訪神は即福德神というわけではない。後述するようにこの辰巳隅から出現するのは神鬼であり、荒ぶる神として顕現れし、後に禰宜との問答に負け属従するのである。この神改めの問答の中には神鬼が地区の人々の生活を脅かさないことを誓うことばは存在しないが、神改めの問答は神鬼と禰宜に象徴される見えざる神との

主従関係の本縁を説くものとして理解できる。

これに対し戌亥隅におられるとされている神は「切目の王子」である。この神は他の神々とは別個に勧請されるといふ特異性から花祭で招請される他の神々とは異なっている。さらにこの神勧請が「四、五十年前までは最も厳肅に行なわれていた様子で白木綿三反で神座の三方を幕を張った如く囲み、北、すなわち戌亥の方を開けて行なつた」ということからこの「切目の王子」を戌亥隅の神として考えることができる。また先の歌ぐらや今述べたことを総合すると

戌亥神Ⅱ切目の王子Ⅱ土公神Ⅱ榊鬼

という式を導き出すことができる。この神々は花祭に関して言えば「荒ぶる神」としての一面が強調されているといえよう。殊に土公神の場合、舞がおわって後の儀式の内に「土公神やすめ」と称する儀式があり、その性格の特質をうかがうことができる。また榊鬼の場合には後にも述べるが禰宜との問答(10)の中に、その荒ぶる神が和御魂へ、もしくは禰宜に象徴される常世の神に屈従する過程を見ることができ(11)。この榊鬼の荒ぶる神からの変質は問答終了後、引き続き行なわれる「反閉(へんべい)」が新菰を敷いた上で踏まれる所に象徴されている。今、手持の資料からはこれらの神々の性格及び機能についてこれ以上論を進めることはできないが、これらの荒ぶる神々がたとえ大いなる神に屈従していくにしても、それが即村人に恩恵をもたらすことにはならない。その為には村人が土公神やすめのような特別な処遇をしなくてはならないと考えられる。

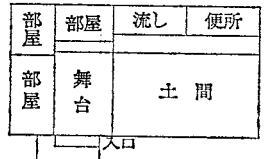
ところで先に述べた神々の内、花祭の次第の中で實際顕現れるものは榊鬼だけでしかない。他の「切目の王子」は神座にて特別に勧請され、また「土公神」も儀式の終了直前のしずめ祭のなかで個別に祀られているがどこにも顕現はしていない。

神鬼の「庭入り」は本来花祭の次第の中にはないものである。これは「へんべ」(反閉)を踏みに各家々を巡った神鬼が花宿に帰還したときのことをいい舞庭はこの神鬼の出現でそれまでとはうって変わった荒々し奮闘気を醸し出す。この神鬼の猛々しい姿に折口信夫の「：常世神と其に対抗する精霊(1)とに扮した神人：」という図式をうかがうことができる。つまり土地の精霊としての神鬼が對抗する魂として出現するのがこの庭入りの場面においてであると見ることがができる。この庭入りの際の激しい動きと、神検めの後のそれは対立から服従へという姿を象徴しているといえる。庭入りで神鬼の舞庭へ侵入する方角は神座を東として、西北、戌亥の隅より現われることになるが、後で触れるようにこの時の神は竈ではなく神座を重視した動きを示している。一通り舞ってから神鬼は神部屋に引きあげる。神鬼と禰宜の問答、もしくは神検めが行なわれるのは次に神鬼が出現した時である。この問答(12)を検討して見ると神鬼は荒霊(あらみまき)荒天狗であるとされている。また歳比べでも神鬼はこの地の氏神に負け、さらに神引きにも負けて、屈従することになるのが古戸の問答(13)からうかがうことができる。

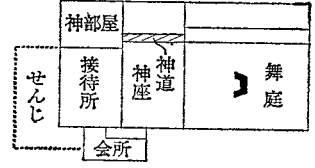
古戸では花祭に先立って部落の北西に位置する白山に登り(14)そこで高嶺祭を祀ったというが、先の神鬼に与えられた褒美の山との関連から興味深いものがある。またこの白山が古戸の北西に位置するということは単なる偶然ではないといえよう。このように花祭には北、より厳密な表現をすれば北西の戌亥の方角に重要な意味が与えられていると考えられる。

花祭における正位としての東は、必ずしも実際の方位による東を意味するものではない。この方位は二通りに設定されてくる。一つは舞庭の竈を中心にして神座に面した側を正位とし、事実のいかんにかかわらずこれを東とする(15)。つまり神座の側を東と仮定し、これより五方位が導き出されるのであるが、これは舞庭全体としてのものといわれている。もう一つは舞及び行事によって竈の前を東とする場合である。つまり神座を基準とするか、または竈を基準と

中設楽(生活改善センター) 図2-a



花宿になると 図2-b



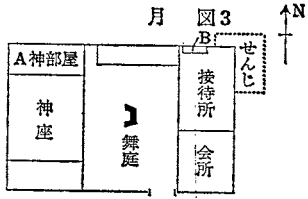
れば明白となる。(20)

図に示した民家と並んでヒダリガマエ(左構?)の家と称される民家も存在するが、それは土間が図の家屋の左側に位置するものと考えていいであろう。この時オクデーの位置は通常家屋の北西にあるのに対し、北東もしくは南東に位置することになる。しかし花祭ではこのカマエの違いは何の支障にもならない。なぜなら五方位が神座、もしくは竈を基準に設定されるため舞庭から見ると神部屋、神座は常に一定した方位に位置するからである。

月地区の公民館を利用した花宿の構造は図3のようになっている。このような喰違変型という構造を有する建物は富山村の方に多く、東栄町を中心とする振草系地域には極く少い部類に属する。尚この地区の民家はほぼ図1の型式を有したものとえよう。(22)

この月地区では図3のBの位置に神鬼等の役鬼の面形がおかれ、しずめもそのBのある接待所で行なわれている。しかし他の舞及び役鬼について出る伴鬼の仕度はAの部屋で行なわれている。民家の場合このように神部屋が分離していたことはない。必ずオクデー

と称する奥の間が神部屋となり、そこで仕度がなされるのである。月の公民館でこのような変った方式がとられるのはAの部屋が手狭なためにBのところを便宜的に役鬼の仕度やしずめの儀式を行っていることであるが実質的にAの神部屋は形骸化してしまっている。ともあれ花祭の神部屋は民家のオクデーもしくはカミノマと称する部屋に設



置されるがこの部屋は神座を正位とするA方位でみれば辰巳に当り、また竈を正位とするB方位では戌亥となる。家のつくりによりこの方位が明白にならないときは神部屋より舞庭に至る神道を調べれば明確になる。

花宿の中心はこの最も神聖たるべき神部屋と勧請された神々の座としての神座、それにこの神座に接した舞庭とよばれる土間であるが、それらは先に述べた方位によって緊密に結ばれているのである。この舞庭のほぼ中央には竈が築かれ、そこに大きな釜がかけられて湯を沸かすようになっていゝ。竈の形からも大入系、振草系の違いを見ることが出来るが別稿にゆずることにする。

花宿における方位の設定について

振草系の場合、神座と舞庭の竈の二つが方位設定の基準となることはすでに述べた。この二種類の設定された方位の存在理由が舞庭全体のものとか、竈の前の場合という理由からではどうも納得し難い。これを祭全体の流から考えてみるとこの二種類の方位の存在理由は神入れの前と後の違いに求めることができる。それは竈を正位とするB方位が実際には神入れが済まなくては用いられないのに対し、神座を正位とするA方位が、八百万の神々をその神部屋へ勧請し、神座に渡る神々の来るべき所として機能していることが理解できる。しかもこの神座は神上かみあがりの諸々の祭文(25)からも判るように神々が花祭の神座を原点としてそこに集約されていることになる。それは歌ぐらの

伊勢の国高天が原が此処なれば

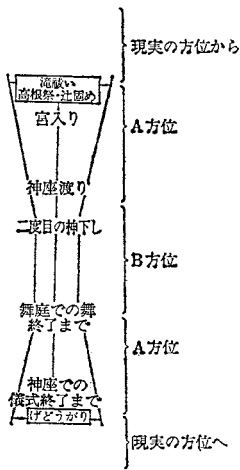
集り給へ四方の神々(26)

と唱われていることに他ならない。またこのことは神座が高天原の象徴として機能していることを意味している。そ

してA方位で入り来るものはこのとき北西Ⅱ戌亥よりこの花宿に参集することになる。

「神入り」という言葉には地区によりいろいろな解釈が与えられているが⁽²⁷⁾ここでは神勧請に関わる一連の神事として理解しておくことにする。今ではこの宮入の儀式を神座ですませる所もあるが神々が降臨するのは本来は神座ではなく、神部屋であることは一連の神事の中に神部屋より神座へ移る「神座渡り」の式が存在することからうかがいうる。ともあれ神部屋もしくは神座に収斂される異次元の来訪者はこの神座渡りによって人間との接触が可能な世界を共有することになったといえる。換言すれば花祭の神事は村の一角に東で象徴される神界としてのあの世と、あの世から来るものを迎える此世との接点を築き——この接点が花宿の神部屋であり、それが拡大されて神座に渡り、舞庭に接することになる。それ故にこの舞庭全体は別の世界であることを象徴するために神座の神々を基準にA方位が適用されることになる。それは神座に神々を迎える村人にとって東Ⅱ西の軸を構成していることに他ならない。ところで吉野裕子は古代日本人の描く世界像⁽²⁸⁾で神界と人間界を東西の軸上に設定している。これは東方の海の彼方の常世国のあり方から帰結される思考として日本の古代信仰を解明する鍵だという。花祭の場合にもこの東西軸上の世界観を見ることができる。しかもそれは仮定されたもので、東西軸が入替るといふ可逆構造を有するという特徴をもち、後述する二段階の神界を想定することによって現実からの象徴的隔絶を示すものでもある。吉野はこの東西の中央に、東から西へ、西から東への神および人間の去来を中継させるものが擬似母胎、「穴」つまり祭場なのだという。それは花祭の中心が神部屋や神座ではなく、竈のある舞庭とされる理由にもなる。事実神事において神座には八百万の神々が勧請されているが舞はこの神座を中心として見てはいない。それは柔の舞およびその他の神部屋から神道を踏んで舞庭に下り立つ者達がまず竈に拝礼していることによる。つまり竈は吉野裕子のいうように神界を象徴する東と、人間界を表わす西との中央にある擬似母胎として機能することになり、村人は神々とともにここに顕現するより高次

これを実際の行事次第に対応させてみると別表のようになる。



(B方位) に対峙するのである。これらを図式化すると次のようになる。

有していなかった竈も、神座渡りの後は祭儀の中心となり、その前に神々も人もあの世から顕現するものを待って東
 は「神ひろい」に続く諸神諸仏を位づける「とのづけ」に見ることがができる。宮入りの段階では何の儀礼的な意味も
 東としての神座、つまり神々の座として収斂されていたこの世界がさらに高次元の神の顕現を求めて拡大する様子
 の神の来歴と威力を語る禰宜の前に屈従し摺伏することになるのである。

神下し―舞い―神下し―舞い―神上げ⁽²⁸⁾
 という区分の中の二度目の神下しが村人が々神とともに顕現を心待ちにする対象ということになる。そして神鬼はこ
 の神を象徴的に西で迎えるのである。このことは行事を通して花祭が次のような区分を有することと無関係ではな
 い。つまり

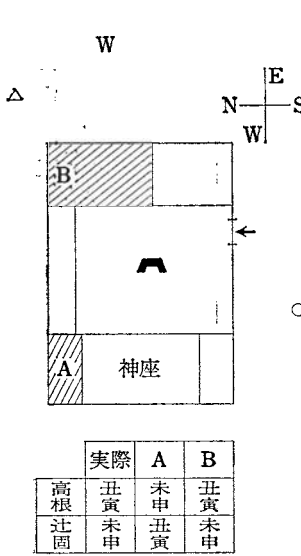
別表

月	方位・転換の指標	古戸	備考
① 滝祓い ② 高根祭り ③ 辻固め	神事 (A方位の設定)	① 滝祓い ② 辻固め ③ 高根祭	
④ 神入れ	宮入り	④ 天の祭	花宿の神部屋までの行事を考える。一度目の神下しでもある。
⑤ きりめのおうじ ⑥ ひいなおろし	神座渡り	⑤ 神よせ ⑥ 殿入り	
⑦ 湯立て ⑧ そうげいむかい ⑨ さるごばやし ⑩ とうごばやし ⑪ しきばやし ⑫ みかぐら ⑬ 桴の舞 ⑭ 一の舞	二度目の神下し (B方位の設定)	⑦ 切目の王子 ⑧ しめおろし ⑨ かま祓い ⑩ 楽の舞い さるごばやし 四季ばやし ⑪ 式さんば ⑫ 順の舞	神座渡りとは神部屋での行事を終了し神座での行事を了えるまでとする。
⑮ 地固めの舞 ⑯ 花の舞 ⑰ 山割鬼 ⑱ 三つ舞 ⑲ 榊 鬼 ⑳ おつるひやら ㉑ ひのねぎ ㉒ 四つ舞 ㉓ 翁 ㉔ 湯ばやし ㉕ もきち鬼 ㉖ 獅子 ㉗ ひいなおろし	B方位の設定解除	⑬ 地固め ⑭ 一の舞 ⑮ 三つ舞 ⑯ 山見鬼 ⑰ 花の舞 ⑱ 榊 鬼 ⑲ 火の祢宜 ⑳ 天の岩戸開き ㉑ 四つ舞 ㉒ 翁 ㉓ 朝 鬼 ㉔ 獅子 ㉕ しめおろし ㉖ 湯ばやし	二度目の神下しは神座での行事を終了し舞庭の竈の前での神事終了まで、つまり新菰上での舞等が続く間と考える。
㉘ 花そだて ㉙ 宮渡り ㉚ 五穀祭り ㉛ 竜王しずめの舞 ㉜ 荒神休め ㉝ げどうがり (神返し)		A方位に復帰	㉗ しずめ ㉘ 神返し ㉙ 探湯祭り ㉚ 荒神祭り ㉛ 宮渡り
	A方位の設定解除 現実の方位へ		神座での儀式に移るときから、 祭終了まで。 (この行事次第は北設郡史による。)尚地区により次第の順序に違いもあるが月と古戸で代表させる。

高嶺祭と辻固め

この高嶺祭(高根とも書く)と辻固めは宮入り、もしくは神入りの前に祭場を中心にして定められた地域内に区割を設ける「かどじめ」の行事の一部である。祭場はこの儀式によって象徴的にそれまでの土地ではなくなり、全く異質の神と人間の交流しうる世界の接点として存在することになるのである。

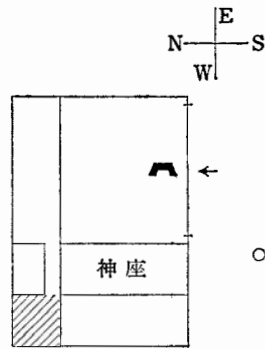
早川孝太郎はこれについて「高嶺祭りは祭場の戌亥に当ってなるべく小高い地点を選んで行なわれる。つじがためは高嶺祭と同時に行なわれるもので、この二者を合わせて『かどじめ』という。よって高嶺祭を戌亥の方角で行なえば、これは辰巳である。さらにこれは祭場の位置と状況によって逆に行なう場合もあり、位置は確定的なものではない。」と記している。(31) ここで問題となるのは「……位置が確定的なものではない。」という記述である。果して本当にそうなのか。そして仮定されたA・B二種類の方位とは無関係なのであろうかという疑問のもとに調べたのが次の図表である。その結果、高嶺祭と辻固めは戌亥、辰巳という方位とは全く関係がないことが明らかになる。しかも設定されたA・B両方位によって調べてみるとこれらは鬼門||裏鬼門といわれる丑寅||未申という軸上に存在していることが判明したのである。



図表は振草系各地の花宿と高嶺祭、辻固めの位置関係を示したものである。図において△は高根、○は辻固めを示す。方位は実際のものを示す。尚距離は関係がないと考え省略。A方位は神座を東とみるもの、B方位は竈を東とみるもの。斜線部は神部屋である。▲は開いている側および所。

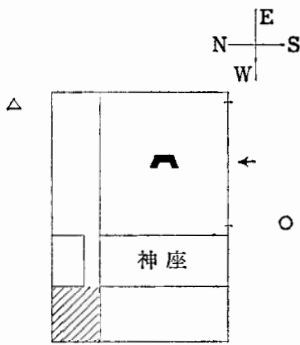
II 中設案

(a) 現在



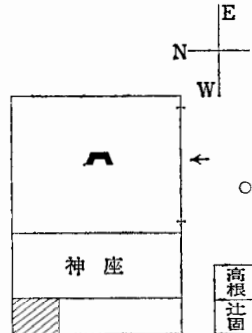
	實際	A	B
高根	辰巳	戌亥	辰巳
辻園	未申	未申	未申

(b) 過去



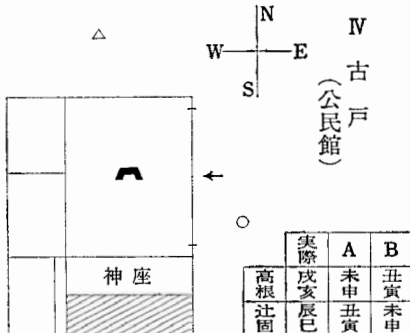
	實際	A	B
高根	丑寅	未申	丑寅
辻園	未申	未申	未申

III 中在家 (公民館)



	實際	A	B
高根	丑寅	未申	丑寅
辻園	未申	未申	未申

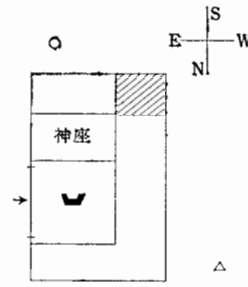
IV 古戸 (公民館)



	實際	A	B
高根	戌亥	未申	丑寅
辻園	辰巳	未申	未申

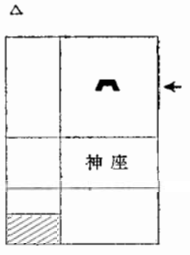
北設案の花祭

V 下粟代
 (a) 一九八〇年(民家)



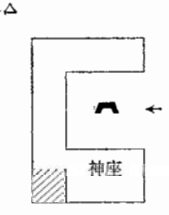
實際	A	B
辰巳戌亥	未申丑寅	丑寅未申
高根辻園		

(b) 一九八二年(民家)



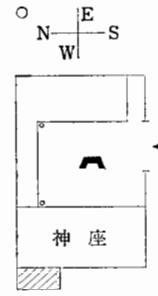
實際	A	B
辰巳戌亥	未申丑寅	丑寅未申
高根辻園		

(c) 一九八二、八三、(公民館)



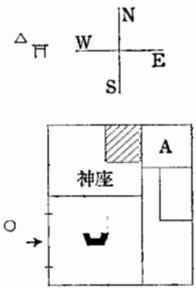
實際	A	B
辰巳戌亥	未申丑寅	丑寅未申
高根辻園		

VI 足込(公民館)



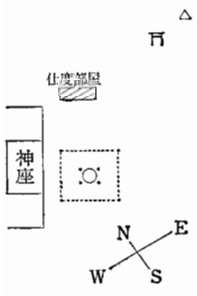
實際	A	B
丑寅丑寅	未申未申	丑寅丑寅
高根辻園		

VII 布川(公民館)



實際	A	B
戌亥戌亥	丑寅丑寅	未申未申
高根辻園		

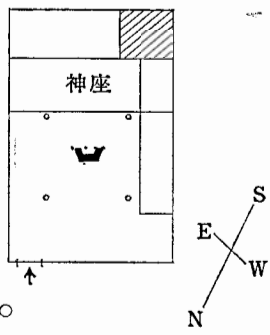
VIII 河内(長峰神社境内)



實際	A	B
丑寅	未申	丑寅
高根辻園		

高嶺祭・辻固め方位一覧

足	c		b		下粟代 a		古戸		中在家		中設楽 b		中設楽 a		月		地名/方位	
丑寅	丑寅	辰巳	辰巳	戌亥	戌亥	辰巳	辰巳	丑寅	丑寅	丑寅	丑寅	辰巳	辰巳	未申	未申	未申	未申	實際
未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	A
丑寅	丑寅	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	未申	B



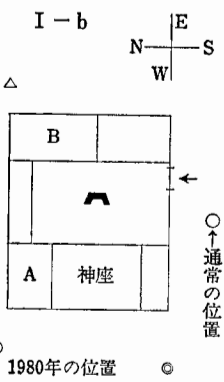
IX 小林 (諏訪神社境内)

小	河	布
林	内	川
戌亥	丑寅	戌亥
未申	未申	未申
未申	未申	未申
丑寅	丑寅	未申

	實際	A	B
高根	/	/	/
辻固	丑寅	戌亥	辰巳

「当日は雨が降っていていつもの所はぬかるんで入れなかった。そのため急拠場所を替えた。」という返事をいただいた。

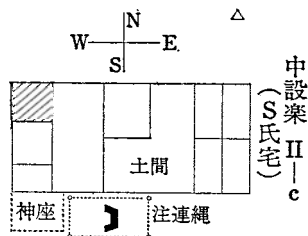
しかも図を示して話をうかがううちに「適当な地点」を求めている間にそこへ到達したが、花太夫氏の意識の内では◎の所の「つもりであった」そうである。仮りに◎点であっても辻固めの位置はA方位で丑寅に、B方位では未申になる。



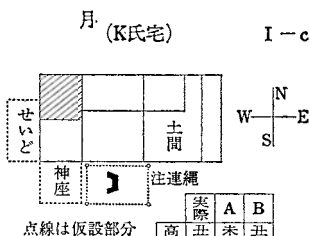
場所の移動について花太夫の森下健之氏に直接尋ねてみたところ、

月では花宿が公民館で一定であるにもかかわらず一八〇年の辻固めは戌亥の方向で催された。高嶺の位置も従来通りであり変動はなかった。(次図I-b参照) この

北設案の花祭



	实际	A	B
高根辻固	丑寅未申	未申丑寅	丑寅未申



	实际	A	B
高根辻固	丑寅未申	未申丑寅	丑寅未申

点線は仮設部分

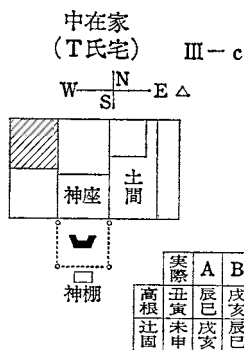
次のI—C図は月の民家での場合である。この家が花宿になったのは戦後のことであるが、当家の老主人がまだ健在であったため聴取することが可能となった。民家での例を求めて尋ねてみると代替りのため当時の記憶がないという場合もあった。また花祭に直接携わる人の場合でも、「昔からこのようにやって来ている」のでという返事しか得られない場合も多かった。なお『月の花祭』には高嶺は宿の戌亥で、そして辻固めは辰巳でまつられる、と記されているが実地に調らべてみる必要がある。

中設案

現在この地区の花祭の高嶺は宿の南東II辰巳で行なわれている。そこは滝破いを行う棚沢を少し登った山の中腹で、中設案を一望できる所である。そして辻固めは花宿の生活改善センターの南西II未申でまつられている。しかし佐々木亀鶴氏の話によると昭和二十二、三年ごろまでは諏訪南宮社の近くの沢で滝破いが行なわれ、

またその近くの豊座と呼ばれる所で高嶺祭が催されていたとのことである。II—bはその話に基づいたものである。この豊座は中設案のほぼ北東II丑寅にあたり、現在の花宿である生活改善センターからみても北東にあたっている。次のII—c図は中設案のS氏宅が花宿になった時の略図である。この略図にみる高嶺と辻固めの位置関係はII—bのそれと全く同じである。

高嶺祭が昔の豊座から現在の棚沢近くへ移された理由は付近に民家が建てられその生活排水などで汚染されてしまったからというものであった。またこの



辻固めの位置が A・B 方位では辰巳 || 戌亥という方位軸上にあることである。しかもこれらは実際の方位上、丑寅 || 未申の軸にある。これは古戸、下粟代の場合と全く逆の関係である。また注意してみると、Ⅲの b、c は実方位において高嶺—辻固めで丑寅—未申という軸と、舞庭—神部屋で辰巳—戌亥という軸を構成しているが単なる偶然ではないであろう。ところで昔の祭場の構成という点に注目するとここは振草系では全く異質であることに気づかされる。

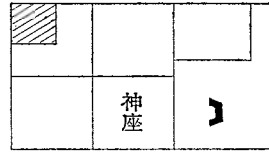
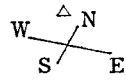
古戸、下粟代

古戸は振草系花祭の中心であったと考えられている。花祭がこの古戸より中設案、足込、月、布川へ。そして足込から中在家へ、布川から下粟代へ伝播したと伝えられている。表を検討してみると

「高嶺祭りを戌亥の方角で行なえば、これは辰巳である。しかしこれは祭場の位置と状況によって逆に行なう場合もあり、位置は確定的のものではない。」⁽³⁷⁾

うなったという。つまり神棚の下あたりは畑であり肥料がまかれていたために建物の西側へ来たのである。さらに注目すべきは竈の位置である。花太夫を勤めた先代の指示にしたがったというこの配置は、まづりはホンダテ（本建？）で行うものであってカマヤ（釜屋？）であるものではないという教えを順守している。なぜカマヤ、土間の方ではないのかという問いに対し、「神さまの位が下る」からという答であった。昔の中在家のようにホンダテとカマヤをわけるといふ考えは、月の民家—b、中設案の民家—c 図にも見ることはできる。しかしそこでは中在家のような発言は聞かれなかった。Ⅲ—b、c 図で興味深いことは高嶺と

IV—b 古戸(I氏宅)



	實際	A	B
高嶺	戌亥辰巳	未申	丑寅未申
辻園		丑寅	未申

という早川の記述を裏づけているのは古戸と下粟代の場合である。殊に下粟代の民家の二例は記述通である。IV—b図は古戸の民家の例である。ここでも實際の方位の戌亥と辰巳にこの二つが来ることが判る。しかしA・B両方位によつてみてこれらは他の場合と同じ丑寅、未申の軸上にあることも確認されよう。

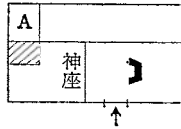
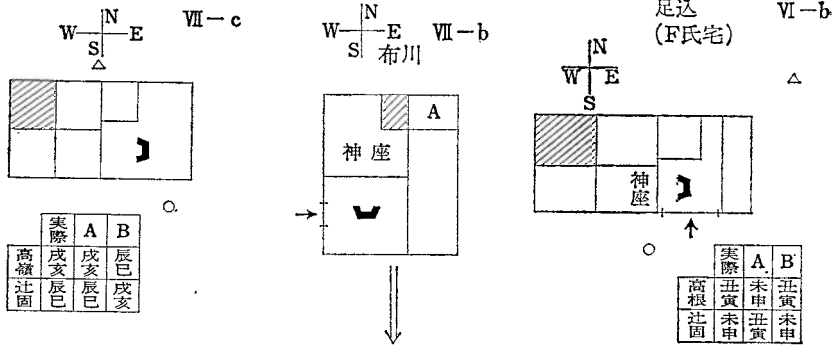
足込あしごめ 布川ふがわ

この両地区の高嶺祭と辻園めは丑寅||未申の軸上にあるが、この二つはほぼ同じ方で祀られている。しかもこれらは数年来同じ位置で祀られていたこと

が旧い御幣の跡からうかがえた。足込の花太夫によると「高嶺まつりは本来七つの峰をまわつてまつるものだ」という。この言葉は大変興味深いものがある。つまり翁の問答にもある「三十三尋の峰七つ」も同じであるが、ここに「九山八海」を説く仏教宇宙論の須弥山説との関係をうかがうことができるのである。つまり花太夫のいう「七つの峰めぐり」とはこの世界の中心の山を取り囲む七つの山を登り来ることを意味し、それを行った後のこの花宿はまさに世界の中心として象徴されることになる。⁽⁴⁰⁾この翁の問題は花祭が単に一地方の祭ではなく、その背景には広い思想的地平が拡がっていることをうかがわせてくれる。

このように七峰をめぐることは時間と手間がかかるため明治二、三年にはもはや行なわれなくなったという。そして現在のように宿の近くの小高い所をえらんで祀られる。次のVI—b図は足込の民家での例である。ここでは辻園めは未申にあり、現在のような位置に来てはいない。この疑問に対し花太夫は「今の所では民家のようなところで(地

北設楽の花祭



形上)できないから」といわれた。事実、公民館の南側には川が流れ、こちらでその祀りをするのが難しいのであろう。この方位を延長して得られたのが現在の公民館での辻固めの位置と考えられる。川沿いに公民館の神座の裏の方に来ないのは、隣家に入ってしまうことと、月のI—bのような事態を考えためでもあろう。つまり、足込の辻固めは本来は丑寅||未申で祀られていたと考えられる。

布川も足込の場合と良く似た状況にある。問題になるのは一つに公民館の構造そのものである。民家に準じて建てられてはいるが方位上約九〇度一般の家とずれていることが他の建物との比較から指摘しうる(図VII—b参照)。さらに花太夫から得た民家での例、VII—cでは民家の北で高嶺をまつり、その前の畑(南)で辻固めをしたとのことである。この場合、高嶺は辻固めよりも川の上流で行なわれなく⁽⁴⁾てはならないとのことである。この地区の川は西から東に向かって流れており、

また公民館での辻固めの祀り方及び先の花太夫氏の話を加味して考えるとVII—cでの高嶺、辻固めの配置は図のようになると思われる。殊に辻固めは、現在の場所では足込と同じように不適当と判断されうる要素もあるため、延長線上のふさわしい地点として選択したと考えられる。またこの場合、布川は他の地区とは全く異なった配置構造を示していることがわかる。ところが対岸に花宿が移館での場

った場合この配置構造は全く通用しなくなってしまう問題が生じる。しかし公民合、高嶺と辻固めの位置に注意してみると必ずしも高嶺の方が川上であるとはいえないのである。しかも話をうかがっている時の図では実際の方位の丑寅（高嶺）、未申（辻固め）に位置しており今後の課題となる。尚、現在公民館の神部屋はⅦ図の斜線部であるが、一九八二年まではAが神部屋として用いられていたとのことである。

小林 河内こうち

小林では高嶺祭は四年に一度、閏年に行なわれることから閏祭と称されている。これは諏訪神社の脇の峰で行なわれるが、その位置は今の花宿のほぼ戌亥になり、A及びB方位では未申、丑寅に該当する。またこの小林の辻固めに用いられる幣は他の地区の五色幣とは異なる切目見目の王子幣であり同一に論じることが考えらるべきであろう。この他籠の構造なども含め小林を振草系に算入することは問題であると考ええる。

河内では花宿は単に舞の仕度をする場所にすぎない。宮人や舞手はその家で仕度をして地区の東北にある長峰神社へおもむいたという。辻固めはその民家のカド（門かど？）で行なわれた。そして神社境内で花が舞われる故にそこには神部屋は存在しないと説明された。Ⅷの仕部屋という名称を用いた理由がそれである。この地では高嶺祭は長峰神社の裏、つまり北東で天狗祭として行われている。現在花宿はもう存在しないが、神社が地区の北東に当ることから試みに強いて方位を導き出してみるとそれは実際の方位の未申、A・B方位の丑寅、未申ということになる。ところがここも小林同様に籠の種類が異なっている。河内の籠は一般的にいわれる大入系のそれであり、舞いも完全に他の地区とは一線を画していることが判明するのである。

小林、河内の他に可能性として中在家も振草系の枠外に置くべきかも知れない。一つにはその籠が大入系と同一

であつた⁽⁴³⁾こともあるが、民家での竈の配置が振草系にその似た所を知らないからである。しかし中在家は足込の花が伝えられたといわれていることもあり今後の課題としたい。

ところで高嶺祭と辻固めの方位であるが、これらの内で早川の記述に添った方位を示しているのは古戸、下粟代、(布川)である。しかしこれらのすべてがA・B方位では丑寅⇨未申で固定していることは注目すべきことである。また実際の方位では丑寅⇨未申にある中在家の民家及び昔の例はA、B方位では辰巳⇨戌亥に来るがこれは先の例の完全に逆を示している。つまり竈の位置を九〇度回転させれば(現在の公民館のように配置すれば)すべてが丑寅⇨未申の軸上に来るが、ここに辰巳⇨戌亥を求める恣意的な操作がなかったであろうか。

辻固めはその名称の「辻」にポイントをおいて「そこ(花宿)へ至るに最も都合の良い道の所で祭るもの」(布川)ともいわれている。この考えは小林、大入系の三沢にも見ることができ。しかし、月、下粟代、古戸等では辻固めは道から離れた田畑の中に設けられており、それが直接道に係わるものではないことを暗示している。このことは下粟代の花太夫の「この家の場合、高嶺祭と辻固めはあの場所しかない」という言葉からある特定の方位に基づいてこれらが導出されたことを意味しよう。しかもこれらが早川の記述にあるように方位が一定しないとするならば、果して神事として意味を有するであろうか。

神部屋・神道

これまで花宿の外の神事の方位について論じて来たが、この方位と密接な関係にあるものが他に二つある。それは神部屋と神部屋より舞庭に続く神道⁽⁴⁴⁾である。すでに指摘したように神部屋はその家のオクデイに設けられるがそれは一般的に戌亥に位置することになる。また神座渡りの前に導き入れられる神々は舞庭を経て神部屋へ進む方位は戌亥

から辰巳に向っているのである。さらにこの神部屋はB方位によってみると戌亥隅に位置することとなっている。中在家の民家のように神部屋はB方位の未申になってしまっているが、舞庭に下り立つ位置は間違いなく戌亥隅となり、配置上の歪みを補正している。このように神部屋の位置が厳密に戌亥に存在しない場合であっても舞庭とそれを結ぶ神道がその本来の方位を人々に示している。戌亥から辰巳にむかい、その辰巳隅が神座渡りによって戌亥に逆転するという非論理的な飛躍の内に花祭の世界の秘密の一つが隠されていると考える。

結 論

以上述べたように花祭の花宿には高嶺祭、辻固めの丑寅⇨未申という方位軸の他に、顕現した神、もしくは高位な神に属従した神の顕現し、退出する方位として辰巳⇨戌亥の方位軸が存在することを論じた。この二つが実際の方位によるものではなく、仮設された方位に基づくのは花宿が神の世界との接点に位置するからである。しかも中有、地上の仇なす諸霊、悪魔、天狗等を防ぎ祀るという高嶺祭と辻固めがA・B両方位において丑寅⇨未申の方位上にあることは陰陽五行説でみると合理的と考えられる。

ここに述べて来たものは振草系の花祭の場合である。資料的に充分検討できていない面もあるが、それを含めて別稿で大入系との比較をしていくつもりである。

註

- (1) 歌詞12、『早川孝太郎全集1』未来社、一九七一年。三三三頁(以下早川Iと記す)。
- (2) これは地区によって行なわれる順序が異なっている。小林のように舞開始前と舞の終了後の二回行うところもある。

- (3) 早川一、四四四頁。
- (4) 前掲書、三一七頁。
- (5) 前掲書、四四八頁。
- (6) 片桐美治『奥三河 小林の花祭』親和プリント株式会社、昭和五七年、九一頁。
- (7) 三谷栄一『日本文学における戌亥の神の信仰』『実践女子大学紀要』第四集、昭和三二年、一八頁。
- (8) 北設楽郡豊根村。
- (9) 早川一、一〇九頁。
- (10) 註の3、4、5及び「神とはいかなる神と問ふならば土公神と答えきかせよ」早川一、一二二六頁。
- (11) 折口信夫『国文学の発生(第四稿)』『折口信夫全集』中央公論社、昭和五七年、一三三頁。
- (12) 早川一、二一五〜二一七頁。
- (13) 前掲書、二一八〜二一九頁。
- (14) 前掲書、九五頁。
- (15) 前掲書、六八、一五八頁。
- (16) これらの例として山内(三沢)、下黒川、東園目がある。小林は神座からみた舞庭の右の柱を東としている。
- (17) 湯ぶたに連る神道、百網の色からみてそう判断する。月、中在家。
- (18) 早川一、五一頁。
- (19) 一九八二年に月地区は宿花を引受けてもいいという家があったが、負担が問題だとする隣組の反対により立消えとなった。現在では宿花の希望者があっても実際に民家で行うには難しい状況になっているといえる。
- (20) 民間の間取りについては、(a)『北設楽郡史』『民俗資料編』昭和四二年、八〇〜八三頁。(b)城戸久、鈴木ツトム「愛知県北設楽郡に於ける農村建築」『名古屋工業大学報50周年記念号』昭和三〇年に詳しい。
- (21) 前掲書(b)五三頁五図、五五頁一三図、一四図、早川一、六四頁図二がそれに当る。
- (22) 城戸久、鈴木ツトム「愛知県北設楽郡に於ける農村建築」五一頁。
- (23) 東園目では「カミノマ」と称し「上の間」という字をあてている。
- (24) 早川一、六七〜八頁。大入系と同じ様式を有しているのは振草系では河内内である。中在家は一九八〇年の時には五徳

式で大入系に近かったがその後は籠の三方を土で固めた振草系一般に見られる形式になっている。また小林の場合は大入とも振草ともつかない違った様式である。

- (25) 片桐美治『奥三河小林の花祭』四九〜六五頁。
- (26) 早川一、二九〇頁。
- (27) 前掲書、一〇三〜五頁。
- (28) 吉野裕子『陰陽五行思想からみた日本の祭』弘文堂、昭和五三年初版、昭和五四年初版二刷。二〇〜四頁。
- (29) 早川一、四四頁。行事次第は四一〜二頁の月を見よ。
- (30) 高根、高子とも書く。別名天狗祭または荒神祭。早川一、一〇一頁。
- (31) 早川一、一〇一〜二頁。
- (32) 芳賀日出男「月の花祭」『芸能』13—2、一九七一年。
- (33) 中設楽、佐々木亀鶴氏談。
- (34) 本郷、伊藤惠基氏談。
- (35) 中在家、竹内家。
- (36) 佐々木亀鶴氏談。
- (37) 早川一、一〇二頁。
- (38) 足込、藤谷源太郎氏談。
- (39) 早川一、三九五〜四二四頁。片桐美治『奥三河小林の花祭』一四〇頁。
- (40) 仏教宇宙論では、世界は最外側の第九と第八の山の間の海上に存在していることになるので最外側の山は教えられなくてもおかしくはない。
- (41) 布川、尾林朝夫氏談。
- (42) 河内、鈴木久二氏談。
- (43) 早川一、六八頁。
- (44) 神道は本来「びゃっけ」のくもかりより舞庭の四隅の柱に引渡される縄状の切紙であるが、ここでは神部屋より舞庭へ舞子達が下りる道筋のことをいう。